

私は2016年1月から2018年1月までJICAボランティアでエルサルバドルに派遣されていた。大好きなエルサルバドル。その時のこと少し思い出したい。



ブエナス！ホームステイ先のお手伝いさんの声に朝目覚め、顔を洗い、身支度を整えると、朝食のフリホーレスとパン、卵が用意されている。このフリホーレス、一見日本の餡子を思わせるが、また違ったコクのある味。最初の一週間ですごく好きになった。パンにつけて食べるおいしい。ここに大体、現地で作っているチーズがついてくる。これがまた

美味しい。夜にはププサと言われる郷土料理を食べることが幸せだった。

最初にホームステイしたのはスチトト。家族は藍染め屋さんをされており、時々手伝わせてもらった。インターネットは町の中の教会のある公園までいかないもなく、ネット社会から切り離され新鮮だった。街に出ると市場があり、そこには安い洋服や靴、食べ物などが売っている。文房具屋さんには、ピニャータが売っており、とても可愛い。夜になると電気を早くに消して月明かりや、星がよく見えた。それでもさすがラテン。音楽好きな人も多く、爆音で夜



もレゲトン

やバチャータといった音楽を流している。その音楽が聞こえてくると、ここは日本と地球の裏側の中米なのだと改めて思った。町は石畳で歩くと、かすかに洗剤の香りがしてくるところがある。所々にきれいな花が咲いている。語学学校から見えるスチトト湖はとても美しい。語学の先生たちもとても面白く親切で、サルサなどのダンスも教えてくれた。





派遣先は首都サンサルバドル。ホームステイ先は新婚夫婦であった。割と歳も近く、友達のように接してくれて、活動の相談にもいつも乗ってくれた。雨が降らない乾季には、一緒にペットボトルや桶を持って水のある所に汲みに行った。約二年間の滞在中、二人には子供ができ、子育てにも少し一緒に参加させてもらえ、とても素敵な経験をさせてもらった。治安の問題もありコロニアという塀で囲まれた団地の中に住んでいたが、その警備員さんもよくチニータ、チニータと声をかけてくれた。近くに八百屋があり、安くマンゴーやパイナップル、パパイヤ、ホコテ（エルサルバドルで採れるフルーツ）などが売っており、いつも買いに行っていた。

配属先の小児・青少年総合リハビリセンターには、たくさんのスタッフが勤務しており、みんな私よりも年上の人たちばかりであるが、どの人たちもとても親しくしてくれた。彼らは日本人がよく言いがちな『もう歳だから』なんていう言葉は絶対に使わない。音楽が鳴るとすぐに踊りだす。その場の誰もが楽しく幸せになるようにみんなで盛り上がる。恥



ずかしいのではなく、楽しむ！そこに着目して生きている。そんな姿がとても印象的で、私自身が生きていく上で大切なこととして学ばせてもらった。時にはぶつかることもあったが、ここには書ききれないほど彼らには助けられたので私は2年間過ごすことができた。

エルサルバドルの人たちは、ジェスチャーでも会話ができる。手を使って、『早く早く』だったり、『どうしたんだい?』といった表現など。とにかく、言葉だけでなくしぐさ、表情で会話をする。そして笑いをつけて話すそんな彼らがとても好きだ。

そんな彼らと離れてもうすぐ3年が経つ。それでも、今の私の生活の様々な時に背中を押してくれているのは、彼らと一緒に過ごした思い出だ。今、新型コロナウイルスによって世界中が混乱しているが、現地のみみんなも頑張っていると時折メッセージをもらう。落ち着いたら、またみんなに会いに行きたいそんな自慢の第二の故郷だ。



勝股歩美（かつまた あゆみ）氏

2016年から2018年に青年海外協力隊 理学療法士としてサンサルバドルのISRI CRINAに派遣される。帰国後は元の職場で2年働き、現在は東京都内の小児の訪問リハビリの仕事をしている。